

---

# Twinkle, Tremble, Tinseltown

セールス・マン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

T w i n k l e , T r e m b l e , T i n s e l t o w n

### 【Nコード】

N 2 0 6 0 Y

### 【作者名】

セールス・マン

### 【あらすじ】

アメリカのどこかにある都市、ティンゼルタウン。夏は暑くて冬は寒い、そして犯罪発生率は州屈指。ここで生きるには少しの冷徹さと多くの知恵、ついでに無限の度胸が必要だ。セックスとバイオレンスに彩られた街で繰り広げられる悪党たちの活躍を描くハードボイルド短編集。

## 登場人物紹介

ティンゼルタウンで蠢く人々について（掲載順、随時追加）名前、紹介、主要人物として登場した話の順です。作者の覚書とも言います。

フェルナン

スピアーズに雇われた運転手兼使用人。

・ Igor's alive

クリスタ

どんな要望にも応えるプロの娼婦。

・ pimp taxi route 1

ギャッジ

女しか乗せないタクシー運転手。

・ pimp taxi シリーズ

スリム

金次第で誰でも狙う狙撃手。

・ The maverick , The proud

以下隨時揭載、加筆。

## Igor's alive

ミスター・スピアーズがまた新しい男めかけを連れてきたらしい。ティンゼルタウンの上流階級はおるか、通いで来ている家政婦の口から相当な下々の者まで噂が伝わるのに、一週間と掛からなかった。

もつとも噂はあくまで噂。そもそもこの街で検事なんて職業は憎悪半分、畏怖半分の眼で見られるのは当たり前だし、彼の犯罪者に対する容赦ないお仕置きは世間に広く知れ渡っている。脛に傷ある連中や資金集めのパーティーの招待状を受け取れなかった有閑マダムは、下世話な風評へ涎を垂らして飛びつくに違いない。材料は揃っていた。ミスター・スピアーズは20年ほど前に結婚した妻をたった半年で追い出して以来独り身を貫いていたし、かといって浮いた話は皆無。料理を作りに来るミセス・カーシュを除いて家で使うのも男ばかりで、それも入れ替わり立ち代りやってくる彼らの特徴がどれも似たり寄ったりときては。

今回運転手とプライベートな身辺警固のために雇われたフェルナも、世間が推測する「採用条件」にぴたりと当てはまる男だった。白人、ジョン・ウェインばりの逞しい体躯、端正な顔立ち、余計なお喋りはなし。そしてブロンドではない。脚立に跨ってニワトコの枝に鉄を入れている姿などノーマン・ロックウェルの描く絵にでも出てきそうな風情があり、声を掛けてみたいと思う女性がいても不思議ではなかった。実際幾人が当たり障りのない会話を交わすことに成功しているし、もうしばらくは挑戦者も後を経たないだろう。

迷惑なのは疑いを掛けられた当の本人で、と言いたいところだが、実際のところ彼の本心はわからない。いくら下世話で勇気ある人間でも面と向かって正体を聞くことは出来ず、かといって彼の経歴を知っている人間もいないので勝手な物語は妄想以上に膨らまない。

街の外のガソリンスタンドで目をつけられた、いや、もともと海兵隊員だった、などと勝手に話が作られても、本人はどこ吹く風。訊ねられたら答えるのだらう。しかし誰も聞き出さずにいた。

結局のところ、皆の疑問は彼が良い人間か悪い人間かという二択問題に尽き、その点に関して言えば、どうやら悪い人間ではなさそうだという結論へ達することに疑問の余地はない。口数こそ少ないものの、フェルナンはその態度で自らの性質をちゃんと表明するこ  
とが出来たからだ。

窓ガラスを叩く指先は赤く、ガレージの外に据えつけられた照明を反射して硬質な輝きを放っていた。灰皿の中でもみ消された煙草が断末魔の紫煙を上げ、細く開いた窓の隙間から溢れ出す。それが髪に纏わりつくことなどお構い無しに、女はシャンパングラスを車内に差し入れた。彼が逆らわないことを知っていたのだらう。丸く結わえてピンを突き刺した茶色の髪の下、テグスで皺を伸ばした顔が艶やかな微笑を湛えている。

「差し入れよ」

強化ガラスが完全に下まで降りきったにも関わらず、フェルナンの表情はまだ読めないままだった。ただ礼儀に則って、明らかに酔っている口調の女へも律儀にどうも、と返す。渡されたペリエ口を付けていないにも関わらず、彼の声は低く心地よくしゃがれていた。

「パーティーは？」

「退屈したらありやしない！ もっとも今回の目的は、ルヌヴィエ・ドウ・ラ・ソミュール伯爵夫人への謁見ですけどね。それにしたつて」

摘まんで掲げた自らのシャルドネをごくりと飲み、綺麗に書かれた眉を吊り上げる。

「あら、これはお家の特産品じゃなくてシャブリなのね」

幾台かのリムジンが押し込められた駐車場は、二人以外の人影が見えない。このご時勢に個人契約の運転手を抱える者など稀だし、その貴重な数人も下層階級用に用意された晚餐を平らげに邸宅の台所へ集まっているところだった。主人の悪口や下世話な噂話が飛び交う社交場へ新しい仲間が滅多に脚を運ばないということは、謎が謎を呼ぶ一つのきっかけになっている。女もそれを聞きつけ、当て込んで来たに違いない。庇のおかげで薄暗い建物の中、胸元につけたダイヤと同じくらい青灰色の両目が輝いている。アルコールのせいではないだろう。高い酒は酔うためにあるのではないのだ。

緋色のドレスを地面に引きずることなど全くお構い無しで、女は磨き上げられた車体に寄りかかった。

「こんな良い男を車に閉じ込めとくなんて、グレッグもワルよねえ」  
フェルナンは微笑んで、窮屈そうにシートへ埋めていた身をまっすぐに据えなおした。大きく開かれた胸の谷間を注視するわけでもなく、青灰色の瞳を失礼にならない程度の真剣さで女の口元に向いている。むしろ相手の体を遠慮会釈なくめまわしているのは女のほうだった。お仕着せのタキシードでは隠し切れぬ二の腕の筋肉は、ジムで個人トレーナーと一緒に設計する観賞用のものではない。

「フェルナンって、どうかしら。フランスっぱいわね。それともスペイン？」

「カナダですよ」

押し出すような口調でフェルナンは答えた。

「当たらずしも遠からずってところ」

「ケベック？」

「Non, madame. Je suis de Vancouver」

「すごい」

きやつきやつとまるで少女のような笑い声を上げ、女は手を叩いた。

「軽口も言えるのね」

でも、と少しだけ眉を顰めグラスを振った際、僅かに残っていたシャルドネが底で跳ねる。

「奥様はやめてちょうだい」

「では……ええ」

数秒動きを停止してから、男の丸い目が瞬く。そして言葉を飲み下した後によってきたのは困惑とかすかな含羞だった。先ほどから男の顔つきは少しずつ、段階的にその柔らかさを増している。固まっていた表情筋が動き始めるにつれ、その面立ちが実はお澄ましなどに向いていないということが明らかになる。動物のように即物的な感情を表に出したとき、男は黙っている時の数倍魅力的だった。

「何と？」

柔和というよりは愚鈍に近い顔に戸惑いを上乘せして、フェルナはいかにも居心地悪そうに肩を揺らした。

「名前」

まるでその瞬間を待ち構えていたかのように、瞳の奥がきらりと光る。機械油の匂いが漂う空気の中で豊かな髪を揺らし、女はほんの僅かに顎を持ち上げた。

「そう、名前だね。堅苦しいのはいや」

身が屈められ、年を食ってもそれなりに美しい顔が同じ高さにまで降りてきたとき、フェルナは片眉を吊り上げた。

「こう呼んで」

女の唇が窄められたのと、男の眼が再び感情を無表情の奥に隠してしまったのはほぼ同時のことだった。

放射状に飛び散った脳漿と筋組織を顔といわず胸といわず浴びた時、フェルナの頭へ咄嗟に浮かんだのは、ああまた怒られる、という慣れきった怖れだった。発射音も掠めた357マグナムに切り裂かれた空気も確かに傍を通り抜けたのだろうがさっぱりわからない

い。それよりも357マグナムによってトマトのように砕けた女の顔右半分で視界が一杯になり、目を強く閉じた。静寂に血塗れた肌の上を撫でられて、そのまま更に眉間に皺まで寄せる。このまま何も聞こえず、主人も車も自分自身も、世界に存在するありとあらゆるしがらみが全て消えてしまえばいい。心の底から思いながら、フェルナンは次に訪れる声を強張った体で待ち構えていた。

「バンクーバーだって？」

彼が願っていたよりも早く、少し高い、滑るような声が血の気の引いた耳朶に滑り込む。手探りで目元を拭い、ついでに右頬へくっついた大きな塊を指二本で摘まむ。ねばつく脛をこじ開ければ、手の中で歪む女の目玉と視線が絡んだ。赤い蜘蛛の巣状の膜に覆われたそれは、先ほどの恐ろしい輝きなどどこへやら。潰れて透明な液体を溢れさせ、血の涙を流しているかのようにだった。

のろのろと顔を持ち上げたフェルナンを待ち構えていたのは、掌にある瞳よりももっとぎらつく青い目だった。既に銃は引金を引いた手とともにコートのポケットへしまい込まれている。

「俺もケベックだと思ってたよ」

引き攣るような笑顔でも、彼にとっては本心からのものなのだ。ここまで汚れてしまえばもうクリーニングも糞もない。袖口で力任せに顔を擦ると、フェルナンは運転席のドアを開けた。崩れ落ちた女の頭に扉がぶつかり、力任せに押しやったが、誰からも文句が返ってくることはなかった。

「グレッグは？」

「まだ会場に」

「顔繋ぎも大変だな」

ふんと鼻を鳴らした様子を静かに見遣り、フェルナンは脱ぎ捨てたジャケットを車の中に投げ入れた。

「お待ちになられますか」

「ああ……いや、いい。ドレスコードに引っかかる」

ジャケット代りに羽織った薄手のスプリングコートを一ひらめかせ、

男は車の後部に回った。

「それにフランス料理は堅苦しくて性に合わない」

開いたトランクに女を放り込むのはフェルナンの仕事だった。魂を失い肉体が重さを増しても苦にせず軽々と抱え上げ、引きずるドレスに躓くこともない。まるで荷物でも運んでいるかのように感情の籠らない動きを嘆くよう、垂れた女の首が左右に振れる。

「先週はどうだった」

乱雑に作ったスペースへ痩せた体は収まるものの、長い裾ははみ出したままだった。丁寧に巻き取り屍の膝に挟み込んでから、男はフェルナンに向き直った。

「あいつ、喜んでたか」

「多分、恐らくは」

台本でも読んでいるような口調でフェルナンは言った。

「はつきりとは分かりませんが」

「冷たい奴だな」

ちよっぴり肩を疎めるのはやはりポーズだけで、その目元は穏やかに笑い皺を刻んでいた。

「社交だなんだって言って、本当にちゃんと出来てるのかね。生きた女一人相手に出来ないくせに」

人の頭を瞬きもせず撃ち抜く癖に、その口ぶりはあくまでも慈愛に満ち満ちているのだ。これは恐らく、フェルナンの知らない遙か昔から何一つ変わりはないだろうし、これから先変わることもないのだろう。滔々と紡がれる悪行の羅列が耳の奥に溜まり、顔に張り付いた血肉が乾いて固まり始める。ぼうつとした意識の中、目だけで捉えていると、男の口から飛び出すものが世にも恐ろしき罪の詳細ではなく、何かもっと人の心を暖める、優しくて美しい言葉であるような気がしてなくなってくる。

「そういえばミスター・スピアーズが」

自発的にか外的要因からか、鈍った脳から声が滴り落ちる。

「部屋に閉じこもられた後、しばらくして中から啜り泣きが」

「気にするな、毎度のことだ」

掻き消すように手を振り、男は苦笑した。

「結局のところ、意気地なしなのさ」

乱暴に閉じられたトランクの音で一瞬掻き消されたものの、ざわめきは確実にこちらへと近付いてくる。首を伸ばし、男は柔らかく目を細めた。

「もうお開きか」

これも買い与えられたロレックスは薄暗さのせいで見えないが、恐らくもうすぐにでも日付が変わる。幸い車を回す使用人たちはまだ台所で燻っているらしい。指にくっついた肉片を剥がしているフェルナンに、男は自らの着ていたコートを押し付けた。

「顔だけは何とかしとけ。後は暗いから分かりやしないさ」

シャツだけだと思っていたのは勘違いで、男はコートの下にアルマーニか何かのジャケットをちゃんと着込んでいた。ポケットには引き抜かれたネクタイまで突っ込んである。もしかしたら軽蔑は口先だけで、彼も会場に紛れて無銭飲食を楽しんでいたのかもしれない。短い付き合いだが、男のそうした俗物的なところをフェルナンはしっかりと見抜いていた。

「そうだ、グレッグに」

身を翻す前に、引金を引いた指がフェルナンの胸をさし示す

「お袋の病院を移すことは反対だって言っといってくれ。あれ以上高いところに入れても、寝たきり老人に勿体無いだけだってな」

頷いたのを確認することなく、男はのんびりとゲートに向かつて歩き出した。血は争えない。短い芝生の上でばかりと浮かんだ男の後姿は、確かにミスター・スピアーズのものと同様だった。今更ながら、今日の月が満月に近い巨大な白さを保って空に浮かんでいたのだと知る。走った寒気に、フェルナンは丈の短いコートを強く握り締めた。

顔を洗ったり車のボディから血飛沫を拭き取ったり、フェルナが自らの根城である運転席へ戻ることができたのは、そろそろと雇い主を迎えに行く運転手たちがガレージに戻ってくる直前だった。暗がりの中を浮かれ歩く陽気な姿から見ると、もしかしたら一杯くらい引つ掛けてきたのかもしれない。声を掛けられたときは答えるものの、それ以外はいつも通り、フェルナはハンドルに覆いかぶさってしんねりむつとりと口を噤んでいた。

ミスター・スピーアーズを拾って帰宅したら、まずはトランクの中のものを主人の寝室に運び込む。車を掃除し、恐らくどこかにめり込んでいるはずの銃弾をほじくり出さねばならない。七時きっかりに起き出すミスター・スピーアーズがシャワーを浴びるために部屋を出た頃を見計らい、血まみれになったシートで取り残された客を包んで庭の納屋に。置いてあるドラム缶の中身を庭のポインセチアに撒き、今度はシートと服を引き剥がした客を中に押し込んで石灰をかける。鍵を閉めたら残りのものをゴミ袋に詰めて二つ向こうの通りにある集積所へ捨てにいく。それから後はもう、いつもどおり。セイヨウカリンの剪定をして、また余計な噂を聞き流す。

それだけのことができる知能に見合う給料が、毎月雇用主からフェルナに手渡されていた。

続々と灯り出したヘッドライトに、黒いハンドルを固く握り締め、指の関節が白く浮かび上がる。いつだったか、この手を女に褒められた事があったのをフェルナは思い出した。指が長くて大きくて、体の割にはとても繊細な造りなのだという。そのときは少し納得したものの、今視線を落とせば太った五匹の蚕が無様に革へ巻き付いているだけにしか見えない。

指に限らず、日々体が昔の人間的な——それは優しく、鋼のような頑強さを持ち合わせていた——ものから、もつと違ふぶよぶよとした何かに変形していく事実、フェルナは慄いた。

それでもこの体を蛆から守るためには、出来ることをやらねばならない。今できることは何かと探る。

ミスター・スピアーズを無事に家まで連れ帰ることだと生存本能が選択し、フェルナンはイグニッションを回してのっぺりとした無表情に顔を戻した。

## p i m p t a x i r o u t e 1

車内に充満した情事の匂いに、クリスタは眉を綺麗に顰めた。もつともその広い眉間に、運転手の迂闊さを呪い侮蔑を感じるほどの高尚さは込められていない。彼女はいつでも本能に促されて言葉を放ち、衝動に突き動かされるまま行動する、それだけの話だった。今もたんぱく質と分泌液の匂いを素直に不快と認識し、代りに吐き出すバニラの紫煙を覆い被せるよう、唇から細い息を吐き出す。

「なんてスベタ！」

「あんたに言われちゃ世話ないね」

組み替えられた膝頭をバックミラー越しに見つめ、ギャツジはふつと息を吐き出した。出るところは出て締まるべきところはきつちり締まっている素晴らしいクリスタの肉体中、数少ない欠点として挙げられるのが大きな膝の骨だった。お陰ですらりと伸びた脚も若干蔽つく見えてしまう。多少がに股気味なのもあり、チアリーディングなりもつと激しい運動をしていたという事実が丸分かりになってしまう。娼婦にすら一定の知能を求めるこのご時勢、彼女の威勢のよさはどちらかと言えばアブノーマルとすら言えた。

「レイチェル？ リサ？ や、彼女はこんなハイスクールのガキンチヨみたいなパフューム付けないよね。この匂い……」

通った鼻筋を軽く持ち上げ、ヘルズエンジェルスから追い剥ぎしたようなレザージャケットの腕を摩る。

「カボティーヌ！」

「キャリーのだよ。文句言うならそっちに廻して」

女とまぐわい続けている最中も囁んでいたガムは、とつくの昔にブルーベリーの味を失っている。鋭い水音は自らの頬の裏側に菓子がかつつ付いたせいか、それとも後部座席のクリスタが鳴らした舌打ちか。古びたイエローキャブのエンジンは余りにも大雑把で、ささやかな音は飲み込みまとめて攪拌してしまう。

「ガキ同士で、お似合いか」

どうせなら下らない眩きも消してくればいいのに。自分がどのような態度を取っても彼女が子ども扱いすると分かっているのに、ギャッジは黙ってハンドルを切った。車は既に大通りを外れ、くねくねと路地に沿って従順に進んでいる。眠ることないネオンや街灯もここまでは届かず、住人が勝手に区切ったコンパネの塀がヘッドライトの単色を乱反射させるばかりだった。

そもそも本来、彼女とて人の生活にとやかく言えるような立場にはない。今日呼び出された場所だってアッパータウンにあるホテル・クレメンタイン。そこそこに良い客だったのだろう。チョコレートクッキーと同じ色をした髪を掻きあげるクリスタは、垂れ気味の瞼を満足げに細めていた。

「お腹すかない？」

「今何時だと思ってるのよ。太るじゃない」

「だって俺、夕食はいつも6時だから」

「あんた晩飯の時間なんて知ったこっちゃないでしょ」

まずいBBQソースの掛かったスペアリブは、四分の一日と少しが経過した今、とつくに血となり肉となっている。不思議なことに、ハイスクールでフットボールを追いかけていた十年前に比べ、彼の胃袋はその燃費を一層悪くしていた。いつもなら今頃は、ダンキン・ドーナツを買いにスミソニアン通りへと車を回している時間帯だ。鼻屑はゴマのついたもの。時折ホットチョコレートを飲んでいる巡回中の太った警察官に挨拶する。

クリスタがその手の人種を毛嫌いしていることは知っているので、ダイナーのスペシャルクラブサンドあたりで我慢してもいいかと思案していた時のことだった。後部座席から柔らかく尾を引く溜息が流れてきたのは。

「やっぱりお腹空いたんだろ？」

「空いてないってば、馬鹿」

返事が幾分鼻声混じりだったことに驚いて振り返る。助手席側の

ドアに身を押し付けるようにしたクリスタは顔を横にねじ曲げ、人っこの一人いない歩道に視線を投げ掛けている。トルコ石のような瞳はいつもの硬さをなくし、テールランプの光で幾重にも滲んでいた。「クリスタ？」

「今日の客はとっても優しかった」

細く開いた窓のおかげでようやく人の体臭が薄まる。籠もっていた煙草の灰が寒空に引きずりだされていく様子を傍観しながら、クリスタは訥々と言葉を続けていった。

「別に縛られてもフィストでも平気。仕事だし、相手があたしのこゝと観て欲情してるって分かったら気分いいしね。でもあんなに優しいのは困る」

「優しくて困るってなんだい」

本格的に彼女への自宅行き最短経路を迂回しながら、ギャッジは訊ねた。

「あんたの胸見てたたないなんて、病気持ちじゃないの」

「ちゃんと勃ててたわよ。でもただ突っ込むだけじゃなかった。髪を撫でられてほっぺたにキスされて。甘い言葉も掛けてくれたし」

語られる手順は、恐らく本当の夫婦ですら子供が産まれた頃にはすっ飛ばしてしまうようなしつこいもの。少なくともギャッジの母は子供たちが物心ついて以来、夫とそのような真似をしでかしていないはずだ。類似品を求めるならば、それは恋人たちの睦み合いだった。笑ってもいいのならいっそ笑ってしまいたい。よりによってその客は、ティンゼルタウン屈指のあばずれと貴い真摯さや愛情を共有しようとしたのだ。

だがその男以上におかしいのは、喋りながらも落ち着きなく煙草を吹かし、時折嚙んでつぐむことでめいめいっぱいの怖れを表現するクリスタの唇だった。彼女はいつでも好奇心旺盛だし、どんなに過激なプレイでも果敢に挑んで愉しむ淫猥さを豊満な肉体に備えていた。特に相手から受け取れる金や奉仕は出来る限り貰っておこうと考えるさもしさなど、いつそ感謝すべき領域に達している。

そんな彼女が、全ての動作に「丁寧な」という形容詞がつきそうな愛撫で怯えているのだ。尋常な事態ではない。この女に尋常さを求めるほうが間違っているのかもしれないが。何せワグナで煙草を吸うのが趣味だとたまえるほどの逸脱した性的観念を持っている。「本当に優しかった？」

眼を凝らしていたら、頭上に数年前潰れたレストランの看板が見えてくるはずだ。分かりにくい通りの出口を上目で探しつつ、ギャツジは仄暗い背後に向かって疑問を投げかけた。

「変なこと、されてない？　自分が気付いてないだけで、実はどんなでもない変態を」

「されてない！」

飛び上がるほどの大声でクリスタは叩き付けた。

「されてないんだってば。もう、なんで分かんないかな」

「ごめんよ」

謝罪は心からのものだった。子供だと言われても仕方がない。学校を出てタクシーに乗り始めてから何年か。もともと言葉に注意を払わない性格も災いし、タクシードライバーの必修科目「気の利いた会話」の単位を取るのはまだまだ先になりそうだった。未履修なら沈黙を貫くのが一番無難だが、元来静かさを好まない性格、勝手に唇から言葉があふれ出す。

「あんただってそれくらい分別はあるものね」

「奥さんが子宮を取っちゃったんだって」

最初からまともに言葉を交わす気などないのだ。クリスタはまだ窓の外を見遣っていた。ひたすら壊れた壁が続く代わり映えのない景色に何を見出したのだろうか。厳しい光を放つまなこは、青や黒、緑や白とそれらを混ぜ合わせた色を複雑な配分で沈ませている。

「不動産の仲介をやってるらしいけど。子供たちも独立してただでも二人つきりなのに、奥さんは晩御飯が終わると自分の寝室に引きこもっちゃうから、彼はいつでも一人ぼっち。苦しいのねって、あたし言ったの。でも彼は違うって」

肺の奥から吐き出された煙は、湿った赤い唇を通過したとき、過剰な分泌を続ける唾液にタールを絡め取られたらしい。いつもよりも甘い香りが鼻先を撫った。

「同情なんていらない、ただ自分は愛したいんだって。君みたいに優しい子に優しくして、親切に扱いたいんだって」

口の中だけでなく目元にまで潤みを帯びさせ、クリスタは煙草を噛み締めた。

「あたしも応えたいって思ったし、彼のセックスは悪いもんじゃなかった。なのにあたし、イケなかったんだ。彼の顔を見ようと頑張ったのに、ベッドの中にいる間、ずっと、ずっと」

ここまで言われて、ギャジはようやく彼女が胸に浮かべる対象を自らも具現化することが出来た。

「ああ、レスのこと？」

じつとりと胸の奥で焦っていた同情が急速に浮き上がり、味気ない口調へと姿を変える。

「あなたの職業、承知で付き合ってるんだろう？」

「そうだけど」

何を今更、とはさすがに言わなかった。だがいつまで経っても歯切れの悪い口ぶりは、吹き込む風に巻かれて一層縮こまる。

「それでもやつぱり、心の中では同じこと考えてるのかなあって。あたしが仕事へ出るたびに」

「そんな性格じゃないと思うけど」

「捨てられちゃったらどうしよう」

「大丈夫だよ」

間髪入れずギャジ返した。見ているのに見ていない。女とはそんなもの。

だから自分の子供が優れているといつまでも思い続けるし、地獄も読めない。

「同情するって言うけど、そんな気なんか」

見知らぬ場所に運ばれたところで、クリスタは自らの憂いに浸

りきっているため気にも掛けない。

「ただ、飲み込みたくなる。好きだなんて言われると。そうしないとくないんだって義務感みたいなのが」

「女ドン・ファンってわけか」

厚かましいナルシズムとネオンの碎け散ったプラスチック、前と後ろから迫りくる煩雑は何の栄養価値も含んでいない。楚々と佇んでいる看板を見上げて思い出したのは、この先で二週間後まで続く夜間工事、そして性欲。自分自身に呆れたら、もう最後まで話を聞く気にはなれなかった。車を路肩に停め、ギャッジは振り返りざまシート越しに身を乗り出した。

「あのね」

「なに」

窓の外に煙草を投げ捨てたクリスタは、懨然とした面持ちで唇を尖らせた。

「説教なんて始めたら許さないから」

「説教っていうか僕の経験だけど」

「経験が聞いて呆れるわ」

「そりゃ僕は娼婦じゃないもの」

そんな柄でもないくせに、ギャッジは汚い言葉を吐くとき、濃い眉を微かに下げた。

「僕が言いたいのは、あんたが好きだ何だって大安売りし過ぎること」

クリスタは黙って口角を下げ、話の続きを促した。「身体売ってるのが嫌なんじゃなくて、いちいち気をやるから腹を立てるんだ。もしレスが怒るとしたらさ」

「女はプツシーの付いた肉じゃない」

クリスタの嘆きは半分近くが自嘲で出来ていた。

「温かくて柔らかい場所が欲しいだけなら、プティングに穴でもあけて突っ込んでろって話」

「だからって」

シートと悲哀に身を委ね、ギャッジは自らのジーンズへ手を伸ばした。

「愛情を切り売りしないほうがいいよ」

男にはそんな器用な真似などできない。心など。誰か一人の女が、それとも永遠に自分だけのもの。やってくるかどうかも分からない機会をじっと待ち続けるなんて、シンデレラも裸足で逃げ出す夢想癖。

妥協したくないとギャッジは思っていた。例えどれほど子供だなんだと罵られようと。生まれてこの方、ちよつとやそつとで怖じ気付いたりはしない性分だった。自信のあつた勇氣はそれでも、積み重ねた妥協の果てにあるものを受け入れるには不十分過ぎた。勝手に流れる時間が、いつの日か強さを上乗せしてくれる時が来るのだろうか。それとも本当に――。

もつとも身体の方は機会を待つほど悠長ではない。ちりちりとチャックの開く音を聞かされても、クリスタは恐怖や嫌悪を覚えなかった。ボクサーパンツを押し上げる立派なものを覗き込み、少年のような口笛を吹く。

「メーター、戻してくれんの？」

「かもね」

動きは素早かった。瞬間にドアを開いて飛び出した身体は、もう一度睨が上下する前に助手席へと滑り込んでいる。上半身を運転手の膝元に投げ出すことも一切躊躇はない。

「男乗せてもこんなこと？」

まず灰色の下着越しに一度舌を押し付けてから、クリスタは訊ねた。広い額に掛かった前髪を掻き上げてやり、ギャッジは首を振った。

「女しか乗せないんだ」

本音が建前か自分でも分かっていることを口にするのはさすがに大人気ない。だが結局彼は、形のいい後頭部を撫でながら、現れた耳たぶへ優しく囁いた。慈悲が滴り落ちそうな声音と裏腹に、

髪を滑る手のひらはまだ汗の一つも滲んでいなかった。

「今夜最後の仕事が好きでもない男なら、あんたも少しは寝覚めがいいんじゃないかと思って」

大きく開いた唇を一旦半開きにまで戻し、クリスタは振ってきた言葉をじっくり噛み締めていた。普段は度を超して表現する媚態も、今はお世辞程すら見せる気がないらしい。

「でもあたし」

全く心の籠もっていない口ぶりでクリスタは言った。

「あんたのこと嫌いじゃないのよ」

白々しい笑みに、ギャッジは無言で唇をねじ曲げた。

女が口を塞ぐ。生暖かい吐息が亀頭全体を包んだかと思えば、次の瞬間には幾分ひからびた口腔内に飲み込まれていた。後はもう、興を削ぐ猛然とした鼻息が車内に蔓延するだけだった。せめて己の聴覚だけでも自ら管理するため、今まで存在を忘れていたガムを右の奥歯に連れ戻す。顎の動きと共に湧き出る唾液が零れないよう何度も喉仏を上下させ、ギャッジは股間で蠢く頭を敢然と見下ろした。「終わったら何か食べに行こうよ。フライドチキン位なら奢るし」

なかなか芯を通さないディックから口を離し、女は真上の笑顔をじろりと睨みつけた。

「これだからガキは嫌なのよ」

## The maverick , The proud .

スリムは我侬だ。本人もそれは自覚していたが、これまでの人生で矯めようと思ったことはないし、周りの誰一人として彼を正しい方向へ導くことはできなかった。理由は単純なようで高度。彼は自分の思うとおりに生きるためにはどうすればいいか知っていたし、実現のための手際よい方法を心得ていたのである。

例えば6年前まで同居していた彼の母親は毎朝5時になると決まって布巾を抱え、キッチンを右往左往していた。眼を覚ましてキッチンへ姿を現したとき、暖かい朝食がテーブルに並んでいないと、息子は数々の罵詈雑言を投げつけ、ひどいときには新聞や灰皿が飛んでくるような事態にまで発展する。物が壊れる音に聞き耳を立て、老女の眼下に浮いた隈を盗み見るにつれ、狭苦しい集合住宅に肩を寄せ合う低所得者たちは一人前に噂を流すようになった。

だがいくら陰口を叩かれ100年に一度の親不孝者の名を冠されても、スリムは一向に頓着しない。彼は12年という歳月を海兵隊員として立派に国へ尽くしたし、毎月欠かすことなく母の年金に高額な生活費を上乗せしている。そもそも不規則な仕事柄、照り付ける陽が朝日と呼べる時間に起き出してくることなど月に数回あればよいほうだった。幼い頃ブラシやハイヒールの踵で散々折檻されたことを考えたら、この程度の横暴など駄々とも言えない。サンディエゴの訓練所に飼われた鬼軍曹は、彼に常なる忠誠の綴りと開き直り、そしてゲームの規則を教えた。時には過程そのものが意味を持つこともある。例えそれが結果を不本意なものに変えようとも。

つまりスリムは母が腎臓癌で冷たい土の中に埋められた後は、自分で食卓を整えることに何の不満も抱いていなかった。特にフレンチトーストの焼き具合など、そこらのダイナーのコック顔負けの腕

前を有しているほどである。

母の食費が浮いて多少の余裕ができた生活費に慢心することなく、彼はまわってくる仕事を勤勉にこなし続けた。イスラム系テロリストが放った迫撃砲で小腸の一部を吹き飛ばされたにも関わらず、支給される年金は雀の涙ほど。事あるごとに吐き出される怒りは隊の根幹を成す忠誠心にまで及び、酒場のカウンターに並んで話に耳を傾ける行きずりの客たちは、その不遜さに驚き半分畏怖半分で震え上がることも度々だった。もっとも生まれてこの方彼が忠誠などとは無縁と知る常連たちは肩を竦めるのみで、行き過ぎた悪ふざけや突拍子もない癪癢に巻き込まれないよう曖昧な態度を貫くのが常だった。

それに口では散々痛罵するくせ、結局のところ彼とて海兵隊の亡霊から完全に逃げ切ったわけではなかった。未だ横流しのM14D MRに固執しているところがその最たるもので、手に馴染んでいるという言い訳の元、神経質なほどメンテナンスを施されたライフルは未だ彼の生活に重要な役割を果たし続けている。伊達に選抜射手を務めていたわけではない。うらぶれた雑居ビルの一室へ忍び込み剥がれかけたリノリウムに片膝をついた姿は「ソルジャー・オブ・フォーチューン」にスナップが掲載されてもおかしくないほど堂に入っている。実際、その肉体はカメラに切り取られたかのように動かない。写真でないと分かるのは細く開いた窓から入るそよ風が伸び気味のジャーヘッドを揺らすからで、それとて襟足の辺りはぴくりともしなかった。かれこれ1時間近く、スリムは耐え難いほどの柔らかさを持つ温もりに顔を晒し続けている。普段の触れなば切れんといった狂気は新緑色の瞳から削ぎ落とされ、ひたむきに照準器の向こうを見つめていた。

高曇りの空は晴天の予兆だった。明日になればでこぼことした廃屋の屋根が連なる裏町にも、気持ちよく太陽の光が降り注ぐだろう。洗濯物は数日分溜まっていたし、脱ぎ捨てられたパーカーも30半ばの男が二ヶ月近く着続けたに相応しい匂いを纏っている。すぐ傍に揉み潰したばかりのラッキーストライクが垂れ流す紫煙も吸い込んだことだろう。いつそ帰り際にそこらのごみ箱へ突っ込んでやりたいほどだったが、寒さが厳しくなるのはこれからだ。夏は蒸して冬は凍えるティンゼルタウンの生活へ慣れれば、アメリカのどこへ行っても快適に過ごせる。数多くの転属を繰り返すうち、スリムはその事実を自らの身で直に感じていた。

玉虫色の空気が顔を包むに任せ、車を待ち構える時間は神秘的だった。スリム自身は取り立て神を信じているわけではないし、悪魔に促されてアベックを狙い撃ちにしたサムの息子の如く自らの行為を美化する気はない。ただ、銃を構え、眼球から右手の人差し指に直通神経が通う瞬間の連続体は、彼の頭をヒマラヤ山脈の空気のように清涼化させた。軍務としてなら国に対する義務を考えるための時間であり、冷えたビールばかり夢想する果てのない待機。それがポジションを砂漠から市街地に変えた途端、単調な生活を仕切りなおすための貴重なひとときに変身するとは。中東にいたときは思いもしなかった事態に自嘲の溜息でも漏らすしかない。適度に集中力を駆り立てた後に飲むものは何でも喉ごしがよく、飯も心なしが美味い。女に対してもより一層熱くなれる。体内で起こる変化が一体どういったものかは皆目検討がつかないものの、仕事とレクリエーションがびったり重なり合っていると考えれば問題は無い。はつきりいって、スリムは今の仕事を気に入っていた。平和なはずの国内に戻っても、結局命を量りに乗せているという皮肉を笑い飛ばせるほどには。

仇名とは裏腹に太く、鋼のような腕に力が込められる。人差し指と中指だけを抜いた黒い皮手袋が皮膚に同化し、待ちきれない爪が引金の固い金属を掻いた。所々粉になった石畳の上を、斑模様の日差しが一層混沌としたものに変える。少しでも変化に富んだ俯瞰図には生き物の気配など見当たらない。存在していることは間違いない。時おり風向きの気まぐれで、ヒップポップまがいの曲が下からのぼってくる。道を挟むようにして繰り返される同じ形をした窓のうち、一体どれから聞こえてくるのやら。銃声も同じように劣化したコンクリートの手で反響させられ、空へと駆け上がるだろう。屋上を闊歩する鳩も驚いて青空へ逃げ出す。

彼が自らの手で驚かせ、いじめる予定だった鳥たちは思ったよりもずつと神経過敏だった。狙撃銃を構えなおし、曲線を描いた銃床を肩に付ける。表面だけが熱を持った頬に木の銃身は優しい冷たさをもたらず。

視界に滑り込んできたのは黒く塗りなおしたらしいアストロで、照準器越しにも十字架のエンブレムがきらりと光る。改造され喧しくなった排気音と閉め切った窓ガス越しにも聞こえるミート・ローフのがなり声に、慎ましく控えていた道脇のゴミ箱がより怯えて縮こまったように思えた。スリムは一度顔を銃から離すと、消しゴムくらいの大きさになったバンを肉眼で確認した。影と同化している後部に対し、陽光の中に突き出た運転席は丸見えだった。助手席にも一人、恐らく後部座席にもお目当てだけでなく、搭乗限度ぎりぎりの人数が押し込められているのだろう。写真で見たわざとらしい余裕ぶつた態度と裏腹に肝は小さいと見た。車のエンジンを切ることはおろか、シェードを入れた窓すら中々開く気配はなかった。

停止してから数分がたち、ようやくスライドドアが開いた。まず姿を現したのは部下の男、黒人。反対側のドアからも一人。右手に握り締められているのはデザートイーグルだった。映画の影響で選ぶ奴がやたらと増えたが、映画と同じ撃ち方をしたらあつという間に肩が外れて真後ろに吹っ飛んでいくことをその殆どが知らない。アフガニスタンで指導した警察学校の生徒ですら最初は片手撃ちで決めようとしたくらいで、今更ながらスリムはメディアの弊害をしみじみ実感せざるを得なかった。

腹を揺すりながら歩くブルドッグと同じ動きで、その男がステップから足を下ろす。取引相手はまだ来ていない。最初から来ない。スリムに金を渡した時点で、正々堂々物事を成す気など更々ないのだ。後は流れ弾や警察の余計な詮索に巻き込まれないよう、じっと部屋の中で息を潜めていれば良いだけ。もともと節穴の眼を持つ警察官はともかく、7・62x51mm弾は人間の頭蓋骨を造作もなく貫通する。ここから先はスリムの独断場。1つ、2つ、と心の中で数え、車を背に立つ男の丸刈り頭に意識を集中する。息巻くエンジンに身を委ね、得意の歌でも口ずさんでいるのだろうか。声までは聞こえなかった。本物のブラックであることは間違いないのだが、肉体が発する音の消えた状態で口を蠢かすのは白黒映画の中に取り残されたミントレスショー役者のように紛い物臭い。事実は違えど本質はあながち間違ってもいないのだ。レンズで無理やり近づけているからこそ距離が縮むのであって、実際は遠い。距離は500メートル。同じ地平線上にいたとしてもすれ違うという言葉すら使えなかった。何が違うか、正しいか。知っているのは自らのことだけ。彼は物事を貫く力を有している。必要なことは、それだけだ。数が5まで達しても、男は動き出さなかった。

人差し指に力を込める。

人体に感じられる距離など銃弾は軽々と飛び越し、スコープの中

の世界は粉碎された頭蓋骨と血肉に溢れていた。車の窓は防弾仕様だという情報を耳に挟んでいたが、頭を貫通した銃弾は見事にサイドウィンドウに白い蜘蛛の巣状のヒビを入れた、のだろう。後は恐らくシートにでも食い込んだらしい。何にせよ追いかけるようにして飛び散った肉片が全てを覆い隠してしまった。

頭領の左後頭部が弾けたのではなく、乾いた発射音に反応したらしい取り巻き立ちは、まず顔を上げる。上下運動したデザートイーグルの男に照準を定めても、相手がどこか分りかねているらしい。側頭の潰れたイーグルマンが真横に吹き飛んでビルの壁に叩きつけられ、助手席から飛び出そうとしたもう一人はウーギーらしきものを片手にこちらを見ようとした。眼が合う前に鼻の辺りが花びらの開くように血で染まり、瞳は意識を放棄した白色に変わる。握り締められた銃は明後日の方を向き、短い連射の音が狭い路地を上下左右に跳ね回った。最後の締めはリーダーの死体を後部座席に押し込もうとする男で、力の抜けた巨体の肩口までを収納するだけで、もう、精一杯。肥満した屍は見事な盾になり、急所を隠す。車はもうすぐ発車するだろう。開いたことで余計かまびすしさを増したミート・ローフの声が消えていった銃声を被さり、リミットを刻む。

必要なのは貫く力。動きではない、息の根を止めてしまうこと。

肩口に掛かる強烈な反動はいつそ快感だった。胴から、尻から、赤い霧が次々と舞い上がる。痙攣する肉の動きはまだ生きていると見まがうほどで、覚せい剤を打ち過ぎた末の偽オルガスムスに良く似ていた。ぐにやりと垂れた腕を掴んでいた手が離れ、こちらに向かって合図しているかの如く大きく振れる。

4 発撃ったところで、最後まで忠実だった男は最低限の動作を以ってその場に崩れ落ちた。

もしかしたら運転席にまで被弾しているかという楽観は、亡骸を

投げ出したまま発進したバンによって覆された。最初から期待していなかったので、照準器ごと視線を動かして見送る。遠ざかっていく音。付け足された四つの肉体を除き、路地は車がやって来る前と何一つ変わらない状態に戻った。

しばらくそのままの姿勢で状況を確認してから、スリムは銃を体から離れた。ブートキャンプでの訓練どおり手早く分解してナップサックへしまい、パーカーに袖を通す。立ち上がったときには長時間の無理な姿勢ですっかり肩や足腰が強張っていた。培った筋肉は見た目こそ衰えておらずとも、比較の対象が現役の海兵隊員時代ではさすがに幾分か劣る。

かといってジムに通うほどの向上心など全く持ち合わせていない。今日だってアパートに帰ったら、カロリーのことなど一切気にせず冷蔵庫の中のバドワイザーを開けるのだと自ら確信していた。確信していた。太陽が地平線へ近づくにつれ暑さを増す部屋は、鍵をこじ開けた時に比べむんとした熱気を孕んでいた。お陰で喉が渴いている。刺すような冷たさと苦味が喉に流れ込む瞬間を考えただけで彼は壁を殴りつけたいほどの高揚と焦燥に駆られた。

ドロップキック・マーフィーズの「ウォーカーズ・ソング」を口ずさみ、ビルの裏口を潜る。地上は意外と涼しく、切れ切れの雲間から青空が覗いているのが分かった。

ふと考えたのは、モーター音のうるさい冷蔵庫に見慣れた缶が入っているかという問題だった。昨日の晩飲んでしまったかもしれない。こんなとき、家に誰もいない不便を感じる。母がいた頃は怒鳴りつけることで20分後には望みのものを手に入れることが出来た。彼女は何も気付いていなかった。気付いて欲しいとスリムが願うには、彼の憎悪は余りにも根深すぎた。ヘアブラシ、靴の踵。連れ込

まれる男たち。不足は怒りを発散させる口実だ。その思考を、彼は悪いことだと全く思っていなかった社会的にも有益とすら考えている。適度のガス抜きは、夜になって仕事の終わった女と遊ぶ際、少しでも相手を怖がらせることなく楽しい時間を過ごすために必要な儀式だった。そのような剥き身のままのむらっ気を怖がる女を彼は好む。いざという時泣き叫ぶ顔がたまらないからだ。

様々な要因が擦れ合って出来たさがを本人も自覚していたが、今更矯めようと思ったことはないし、周りの誰一人として彼を正しい方向へ導く気など起こさなかった。彼は自分の思うとおりに生きるためには周りを適応させればいいことを知っていたし、実現のため時には逆に自らを適応させる方法を心得ていたのである。

スリムは本当に我侷な男だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2060y/>

---

Twinkle, Tremble, Tinseltown

2011年11月4日05時22分発行